

審査の結果の要旨

論文提出者氏名：山本 巍

古代ギリシアの哲学は、そのはじまりから「存在」の哲学であった。しかも、存在は思惟と堅く結びつき、したがって存在は理性（ヌース）ないしことば（ロゴス）による了解に依存している、と考えられた。存在を思惟することは、理性的動物としての人間の特権であり責任とされたのである。ところで、存在は、ただ単に「ある」のではない。ギリシア人は、存在をむしろ「立ちあらわれ」と理解していた。存在のこのような現前理解は、時代が下るにつれ存在の非現前と必然的に結合していく。したがって、存在は決してその姿をあらわさない「深淵」をたたえている、ともされていくのである。

山本氏は、ヨーロッパの存在論的哲学の淵源である古代ギリシア哲学に見られる存在理解のダイナミズムを、とくにソクラテスないしプラトンと、アリストテレスの哲学の透徹した読解を介しつつ、「ロゴス」と「深淵」という二つの柱を立てることによって剔出することに成功している。その中心に置かれているのは、「人間」である。その際、氏は、二つのテーゼを提出する。一つは「人は人が隣にいるかのように生きてはならない」というテーゼであり、一つは「人は人が隣にいないかのように生きてはならない」というテーゼである。前者は他の個体と並列しない局所特異点としての人間であり、後者は虚焦点としての人間であって、歴史、自然等を含む世界は後者の事柄とされる。したがって、氏の論は、いかにして人間の個体化の遂行が徹底的に行われるかを一方に見据えながら、他方において人間はいかにして公共社会や自然万象へと披かれていく存在となりうるかを探究するものであり、哲学的人間論として現代のアクチュアルな問題と深くかかわっているといえる。

本論は、八章から構成されている。最初の二章は主にソクラテスが、三章以下は主にアリストテレスが取り上げられる。以下、氏の議論を要約する。一章「鉄の孤独と対話問答法 —プラトン『大ヒピアス』から」では、各人の異なりを前提とする特殊言語としての「わたしのことば」が対話者相互の問答によっていかにして普遍的な「われわれ言語」へと披かれ導かれていきうるかがプラトンの対話篇『大ヒピアス』を例にとり論じられる。そして、普遍的な真理理解の地平を得ることの至難さが指摘されるとともに、同対話篇のテーマである美に関し個々の美しさを突破するアイデアとしての美の力動性が指摘され、それがソクラテスの対話問答法の目ざすところと並行していることが論証される。二章「こころの内は外 —ソクラテスの対話の現実」では、古代ギリシア人は存在を露わな立ち現れと理解し、したがって存在の背後に何か隠れたものがあることを認めなかったことが指摘される。そして、ソクラテスの対話問答法とは、このような表面主義の伝統を踏まえて、ともすれば聖域化されがちな内面への退行を許さず、存在の真理を可能なかぎり言語化する努力を人間に求める、こころの表面と限界にあくまでもこだわった、新しい表面主義を形成したものであることが明らかとされる。

三章「人間の位置 —自然と性の脈絡で」では、人間を決定的に規定していると一般に考えられる性と自然の問題が考察されるとともに、しかしアリストテレスにおいては理性のみがこれらを超越する力動性そのものと理解されており、人間存在が血縁や自然世界も消え失せ、身体の知覚能力の臨界点をも超えた、いわば永遠の底からこそ立ち現れてくることが指摘される。これを受けて四章「言語から実在へ —アリストテレスと人間原理」では、自然万象と人間における個体化の構造が分析され、万物の頂点に位置すると考えら

れた人間とは、自然的世界に属しながらもこれを統合する存在であり、それはこころと身体の相即的作用と並行していることが指摘されるとともに、それを可能にしているのは実は一切の経験的事実を超えた理性の思考に拠ることが明らかにされる。五章「哲学の「初め」と局所言語空間 —『形而上学』第一卷第一章～第三章」では、知ることを本性上求める人間が追求するその知とは、存在をめぐる真理の洞察の謂であって、すべてのものが単純にそこで消え去る消滅点の探究であり、また世界と人間全体の根拠を知ろうとする衝迫であることが論じられ、ことばの途絶える極点としてのそれが実は哲学のことばが誕生する生起点でもあることが指摘される。六章「中間者の現実 —アリストテレスの視点から」では、真理を無条件な全体として探究するこのような哲学が人間にとって不可能性として存在していることを見据えつつも、にもかかわらず無限大と無限小の中間に位置する人間にとって自己が宇宙の揺るぐことのない中心であり、全宇宙のエネルギーはこの人間に惜しみなく注がれており、みずからを虚焦点として存在全体の意味と根拠を探究しうることが、エネルギー論を踏まえて主張される。七章「「一」と現実 —アリストテレスからの接近」では、アリストテレスの動物研究が種としての動物それぞれを局所的に「一」なる全体として浮かび上がらせる試みであることが示され、一方人間に関しては通約も還元も不可能な一である自律的個体が結集することによって民主的な理想国家の可能性が説かれたことが指摘される。しかし、一たる自由な個人の実現は、かえって一という現実人間が耐ええず、つねに多へと解消する性向が人間存在の根本にある逆説的事実が洞察される。八章「人間とこれを超えるもの —ギリシア哲学からの前途瞥見」では、これまでの議論を踏まえ、真理が隠れているから人間は自由にふるまえるのであり、そこに人間の学としての倫理学が成立することが論じられるが、にもかかわらず善悪未生の全体の観照によってこそ人間はほんとうの人間となりうる、人間は人間を超えてこそ人間となりうる、とするアリストテレスの哲学の真髓が探究される。

本論文は、以上のように古代ギリシア哲学を智への愛である哲学ならしめたものが何であるかをプラトンとアリストテレスの著作をきわめて精緻にかつ柔軟に読み解き読みほぐすことによって具体的に明らかにしたものであり、独創的な知見を随所に示しつつ、従来になかった新しい古典文献学的理解と解釈を提示しており、哲学することとはどういうことかを如実に実践している論といえる。したがって、本論文はプラトンやアリストテレス思想の祖述にとどまる単なる思想解説などではなく、これらの哲学者がまさに目指したところのものを今という場において哲学的にさらに推し進めていく知のダイナミズムに溢れており、学界に多大な寄与をする画期的な論攷と高く評価できる。また、生と死の問題を正面から取り上げ、しかもそれをヴィトゲンシュタインなどの現代哲学ばかりではなく、日本や中国の詩文をも数多くかつ的確に引用しながら実存的に深め探究した清新な構築にみちあふれており、まさに思索の原点へと立ち返らせる得がたい書となっている。さらに、哲学を狭い個人の思索に閉じ込めず、哲学する個を広く公共空間のなかへ披かしめようとする積極的な姿勢はいわゆる公共哲学への道筋を時代に先駆けて示しており、氏の哲学的思索の深さと幅広さを如実に現わしているといえる。

なお、本論文に対し、将来的な展望も含めて次のような問題が審査委員から提示され応答された。第一に、人間存在の中心にあるとされたロゴスを病気その他なんらかの理由で欠損した人間に対してギリシア哲学はどのような態度をとるのかという疑問点に関しては、ギリシア哲学では実践的生による判断ではなく、むしろ観照的な生による判断が人間にとって本質的な意義をもつと考えられており、そこに現代にとって積極的な意義が存することが確認された。第二に、本論文には聖書から比較的多くの引用が見られるがキリスト教の問題はギリシア哲学とどう結びついているのかという指摘がなされ、これに対してはイエスという人格の特異性の重要さが確認された。また、個体ないし個人がポジティブにと

らえられすぎているくらいがあるのではないか、という指摘もあった。しかし、本論文が、学界に画期的な学問的貢献をすることは確かであり、指摘された箇所は本論文の瑕瑾とするにあたらないというのが審査委員全員の意見であった。

したがって、本審査委員会は、全員一致して、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。